

愛息に種痘を試し、感染症から藩民救った幕末の医師



緒方洪庵が江戸後期

に大坂・船場に開いた私塾「適塾」（筆者撮影）
ギャラリーページへ

（柳原 三佳・ノンフィクション作家）

新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化する中、国から「接触機会8割削減」という目標が発表されました。

あと1カ月、自宅の中でいかに時間を過ごすか・・・、不安を感じながら、いろいろと計画を立てている方も多いことでしょう。

そんな中、TBSは人気ドラマ『JIN－仁－』の再編集版を、今月18日から3週連続で放送することを発表しました。

（参考）[『JIN－仁－』大沢たかお呼びかけ「神は乗り越えられる試練しか与えない（4.11/オリコンニュース）](#)

TBSのサイトからこのドラマのあらすじを一部抜粋します。

『突如、幕末へタイムスリップした現代医・南方仁。麻疹、コレラ、梅毒など、江戸の世に巢食う恐るべき病やケガに、現代の医療知識を武器に立ち向かう!!』

タイムスリップ・・・、現実にはあり得ないストーリーですが、ドラマには佐久間象山、緒方洪庵、松本良順、勝海舟、坂本龍馬、近藤勇などなど、当時活躍した実在の人物が続々と登場します。

そして、大沢たかお演じる主人公「仁先生」の魅力が、CGで再現された江戸の町のリアルな風景や時代考証によってさらに引き立てられ、自分自身が幕末にタイムスリップしたように引き込まれていく・・・、そんなドラマです。

何より、幕末の医師たちが、目に見えない感染症に向き合い、命を懸けて闘うシーンは、今、まさに新型コロナウイルスの脅威に直面している私たちに新たな勇気や感動を与えてくれそうな気がします。

佐久間象山に蘭学教授したのは佐野鼎の同僚だった

さて、ドラマの中で「仁先生」がタイムスリップした幕末は、まさに「開成をつくった男、佐野鼎（さのかなえ）」が活躍した時代そのものでした。

そして、このドラマに登場する歴史上の人物たちは、実は佐野鼎のすぐそばにいたのです。

そこで今回は、佐野鼎が加賀藩の学問所「壮猶館（そうゆうかん）」に勤めていた頃の同僚で、後に「近代医療の祖」とも呼ばれた医師・黒川良安（よしやす）という人物の足跡を辿ってみたいと思います。

黒川良安は1817（文化14）年、加賀藩に仕える医師の息子として現在の富山県に生まれました。

11歳のとき長崎へ留学し、天文学、地理学、論理学、数学、兵学などを学び、蘭学者となったのちは、伊東玄朴（げんぼく）、高野長英らと同じく、ドイツ人医師・シーボルトから西洋医学を学びます。

また、大坂で適塾を開いていた医師・緒方洪庵とも親交があり、緒方からも西洋医学を教授されました。

黒川は佐野鼎より12歳年長です。佐野自身も長崎海軍伝習所で学んだ経験がある蘭学者でしたから、おそらく互いに深い交流があったことでしょう。

ちなみに、『JIN-仁-』にも登場する兵学者・佐久間象山は、この黒川良安から蘭学を学んだことで知られています。

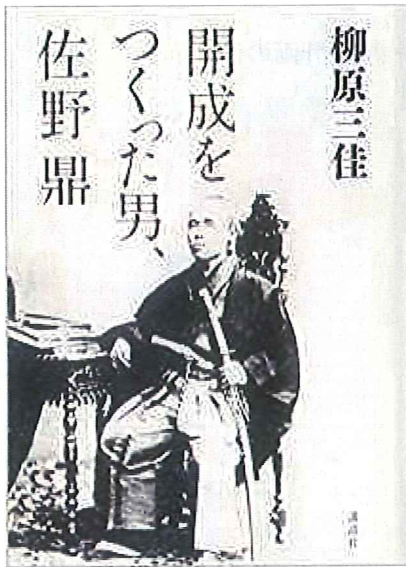
「天然痘」の予防のために心血を注いだ幕末の医師たち

この当時、世界中で猛威を振るい「悪魔の病気」として恐れられていた病に、「天然痘」がありました。とにかく強い感染力を持ち、致死率も大変高かったようです。

江戸時代の後期になると、各藩の医師たちはこの恐ろしい感染症をなんとか予防しようと、「種痘（しゅとう）」の研究にのめり込みました。

「種痘」とは、天然痘の予防接種のことです。

日本では1790年、秋月藩（現在の福岡県）の医師・緒方春朔（おがたしゅんさく）が、いち早く「人痘種痘法」を成功させています。



[『開成をつくった男、佐野鼎』（柳原三佳著、講談社）](#)

[ギャラリーページへ](#)

その6年後、イギリスのジェンナー医師が、牛からとった牛痘（ぎゅうとう）を用いてワクチンを開発し、世界各国に広がっていきました。当時は「牛痘を接種したら牛の角が生えてくる」と、恐れる人も多くいたそうです。

ジェンナーのワクチン開発から約60年後、日本でも西洋医学を学んだ医師たちによって、佐賀や京都、大坂、江戸などで牛痘法による種痘が行われるようになりました。

黒川良安も加賀藩で種痘を広めようと尽力します。

彼がまず行ったのは、自身の息子に種痘を接種させることでした。

そして、その効果を確認したうえで、1862年、金沢に「種痘所」を設置し、その結果、多くの藩民の命を天然痘から救ったのです。

自信はあったにせよ、恐ろしいウイルスを我が子に植え付けるというのは、どのような心情だったことでしょうか。

「種痘所」が創設された金沢市安江町には、現在、『彦三種痘所跡地』という石碑が建てられ、以下のような碑文が刻まれています。

『当時恐るべき災厄であった天然痘を種痘により未然に防ぐため、加賀藩は1862（文久三）年三月に彦三種痘所を開設し 黒川良安 津田淳三 大田美農里 高峰元稔 鈴木儀六 伏田元幹ら計

二十五名の医師がこれに参画した彦三種痘所はこの地に存在したと推定され 卯辰山養生所金沢医学館 石川県甲種医学校 第四高等学校医学部 官立金沢医科大学 国立金沢大学へと続く系譜の淵源となった』

いつの時代も、目に見えない感染症との闘いは熾烈を極めていたようですが、加賀藩では今から158年前、すでに藩として天然痘の予防接種を確立させていたのです。

天然痘ウイルスはその後、撲滅され、WHOによると、1980年には自然界から完全に消え去っているとのことでした。

金沢大学医学部に今も残る江戸時代の人体解剖模型

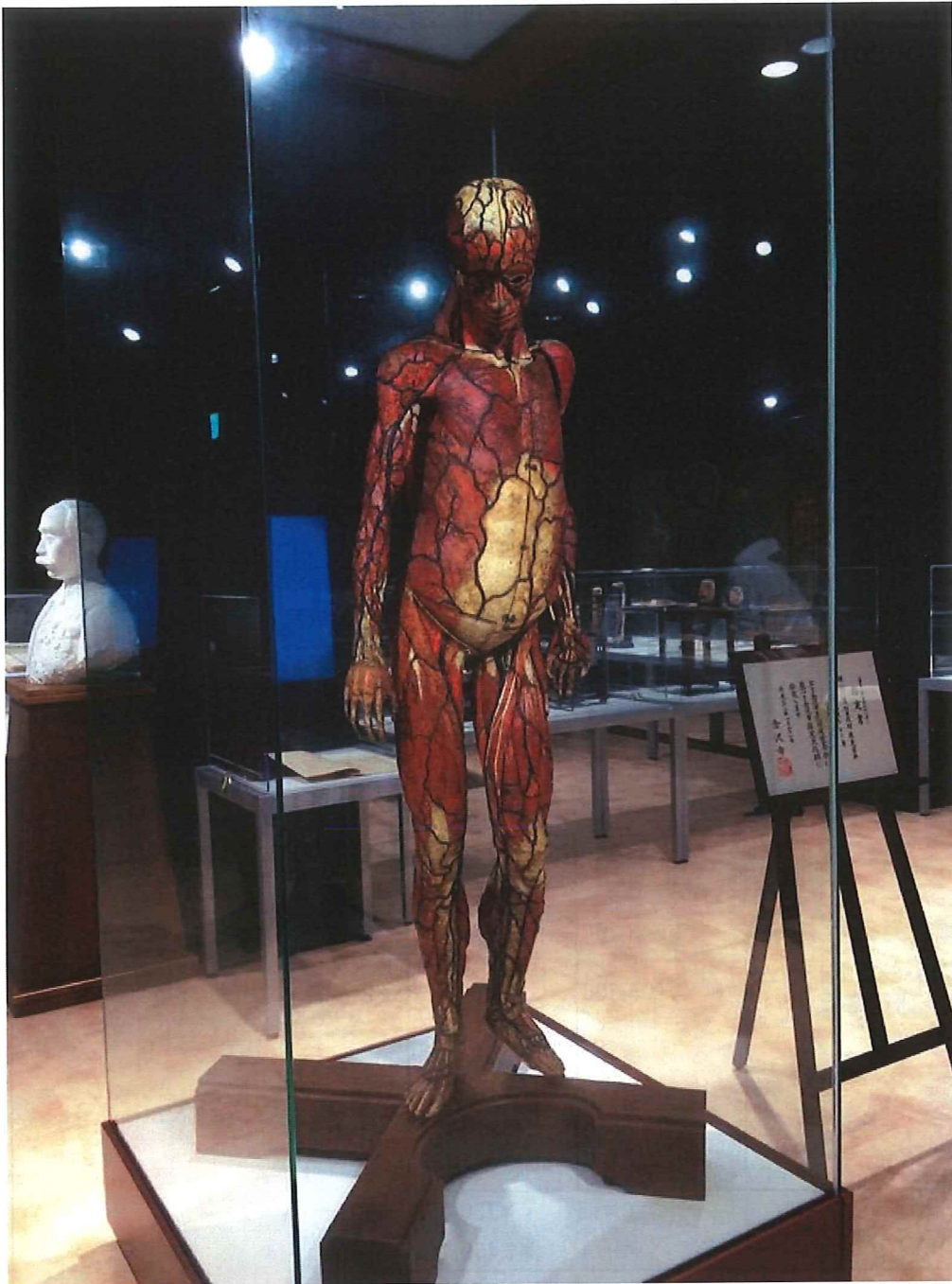
1870（明治3）年、「種痘所」のあった場所に「金沢藩医学館」が創設されました。

教授となった黒川良安は、その後、多くの医師の育成に当たり、1890（明治23）年、74歳で亡くなりました。

金沢藩医学館は、その後、金沢大学医学部となって現在に至ります。

キャンパス内にある医学部記念館には、黒川良安が1868年、医学教育のために長崎から持ち帰ったオランダ製の人体解剖模型「キンストレキ」（オランダ語で「人工の死体」の意味）の現物が、有形文化財として保存展示されています。

私も間近で見学したのですが、身長167センチの男性の模型は、筋肉の色、血管など実に鮮明、精巧で、頭から足先まで右半分が開くようになっており、内臓のパーツはすべて取り出せるようになっています。



金沢大学医学部記念

館に展示されているキンストレーキ (筆者撮影)

[ギャラリーページへ](#)

この模型は1825年にフランスで量産され、支柱は金属、内臓などのパーツは粘土に紙や繊維等を混ぜたものでできているとのこと。

佐野鼎は1861～62年、幕府が派遣した遣欧使節の随員としてヨーロッパを視察し、パリにも立ち寄っていますので、すでに「キンストレーキ」の現物を見ていたかもしれません。

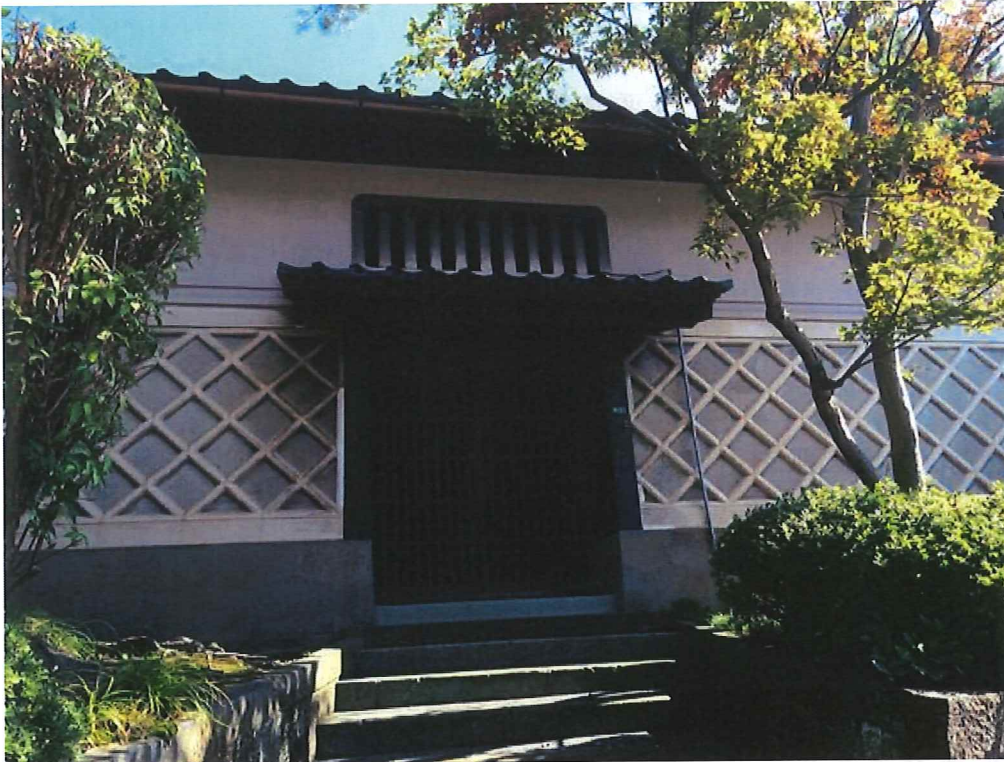
黒川良安にとっても、海外事情に詳しい佐野鼎は頼もしい相談相手だったのではないのでしょうか。

このほかにも同記念館の展示室には、胎児の模型、目玉の模型、その他各種臓器の標本や医学書など、医学生教材として使われていたものが、約200点展示されています。

電気もない時代、彼らはろうそくの明かりを頼りに勉学に励んでいたのでしょうか。

保存されている数々の史料を見ながら、当時、近代医学を志した医師たちの熱い思いが伝わってくるようでした。

ちなみに、幕末に佐野鼎と黒川良安が師範として通った加賀藩の「壮猶館」は、現在、その門だけが金沢市内（柿木畠の石川県知事官舎の横）に残っています。



壮猶館の門（筆者撮

影）

[ギャラリーページへ](#)

まさに、この場所に集う志の高い若者たちによって、平成からタイムスリップしてきた「仁先生」もビックリの、近代的な西洋医学研究が行われていたのです。